

黒い人と赤いそり

小川未明

青空文庫

はるか、北の方の国にあつた、不思議な話であります。

ある日のこと、その国の男の人たちが氷の上で、なにか忙しそうに働いていました。冬になると、海の上までが一面に氷で張りつめられてしまふのでした。だから、どんなに寒いかということも想像されるでありますよう。

夜になると、地球の北のはてであつたから、空までが、頭の上に近く迫つて見えて、星の輝きまでが、ほかのところから見るとは、ずっと光も強く、大きく見えるのであります。その星の光が寒い晩には凍つて、青い空の下に、幾筋かの銀の棒のように、にじんできいるのが見られたのです。木立は音を立てて凍て割れますし、海の水は、いつのまにか、動かなくなりました。鉄のように凍つてしまつたのであります。

そんなに、寒い国でありましたから、みんなは、黒い獣の毛皮を着て、働いていました。ちようど、そのとき、海の上は曇つて、あちらは灰色にどんよりとしていました。

すると、たちまち足もとの厚い氷が二つに割れました。こんなことは、めつたにあるものでありません。みんなは、たまげた顔つきをして、足もとを見つめていきますと、その割れ目は、ますます深く、暗く、見るまに口が大きくなりました。

「あれ！」と、沖おきの方に残のこされていた、三人にんのものは声こえをあげましたが、もはやおよびもつかなくなつたのです。その割われ目は、飛とび越こすことも、また、橋はしを渡わたすこともできないほど隔へだたりができて、しかも急きゆうりゆう流りゆうに押おし流ながされるように、沖おきの方ほう方ほうへだんだんと走はしつていつてしまつたのであります。

三人にんは、手てを挙あげて、声こえをかぎりに叫さけんで、救すくいを求もとめました。陸りくの方ほうに近い氷こおりの上うえに立たつているおおぜいの人ひと々びとは、ただ、それを見送みおくるばかりで、どうすることもできません。んでした。

たがいにわけのわからぬことをいつて、まごまごしているばかりです。そのうちに、三人にんを乗のせた氷こおりは、灰はい色いろにかすんだ沖おきの方ほうへ、ぐんぐんと流ながされていつてしまいました。みんなは、ぼんやりと沖おきの方ほうを向むいているばかりで、どうすることもできません。そのうちに、三人にんの姿すがたは、ついに見えなくなつてしまいました。

あとで、みんな大騒おおさわぎをしました。氷こおりがとつぜん二つに割われて、しかもそれが、箭やを射いるように沖おきの方ほうへ流ながれていつてしまうことは、めつたにあるものでない。こんな不思議ふしぎなことは、見みたことがない。それにしても、あの氷こおりといつしよに流ながされてどこかへいつてしまつた三人にんを、どうしたらいいものだろうと話はなし合あいました。

「いまさらどうしようもない。この冬の海に船を出されるものでなし、後を追うこともできないではないか。」と、あるものは、絶望しながらいいました。

みんなは、うなずきました。

「ほんとうにしかたがないことだ。」といいました。しかし、五人のものだけが頭を振りました。

「このまま仲間を、見殺しにすることができるものでない。どんなことをしても、救わなければならぬ。」と、それらの人々はいいました。

すると、おおぜいの中の、あるものは、

「今度のことは、この国があつてから、はじめてのことだ。人間業では、どうすることもできないことだ。」といったものがあります。

なるほど、そのものがいうとおりでだと思つたのでしよう。みんなは、黙つて聞いていました。

「みんながゆかなければ、俺たち五人のものが助けにゆく。」と、五人は叫びました。ちやうど、この国には、赤いそりが五つありました。このそりは、なにかことの起こつたときに、犬にひかせて、氷の上を走らせるのでした。

夜の中に、五人のものは、用意にとりかかりました。食べるものや、着るものや、その他入り用のものをそりの中に積み込みました。そして、夜の明けのを待つていました。その夜は、いつにない寒い夜でしたが、夜が明けはなれると、いつのまにか、海の上には昨日のように、一面氷が張りつめて光つていたのです。

五人のものは、それぞれ赤いそりに乗りました。そして、二、三匹ずつの犬が、一つのそりをひくのでした。

昨日行方不明になった、三人のものの家族や、たくさんの群集が、五つの赤いそりが、搜索に出かけるのを見送りました。

「うまく探してきてくれ。」と、見送る人々がいました。

「北のはしの、はしまで探してくる。」と、五人の男たちは叫びました。

いよいよ別れを告げて、五つの赤いそりは、氷の上を走り出しました。沖の方を見やると、灰色にかすんでいました。ちようど、昨日と同じような景色であったのです。みんなのものの胸の中には、いい知れぬ不安がありました。そのうちに、赤いそりは、だんだん沖の方へ小さく、小さくなって、しまいには、赤い点のようになって、いつしか、それすらまったくかすんでしまつて、見えなくなつたのであります。

「どうか無事に帰ってきてくれればいいが。」と、みんなは、口々にいいました。そして、ちりぢりばらばらに、めいめいの家へ帰ってしまいました。

その日の昼過ぎから、沖の方は暴れて、ひじような吹雪になりました。夜になると、ますます風が募つて、沖の方にあたつて怪しい海鳴りの音などが聞こえたのであります。

その明くる日も、また、ひどい吹雪でありました。五つの赤いそりが出発してから、三日めに、やつと空は、からりと明るく晴れました。

三人の行方や、それを救いに出た、五つの赤いそりの消息を気づかかって、人々は、みんな海辺に集まりました。もとより海の上は、鏡のように凍つて、珍しく出た日の光を受けて輝いています。

「ひどい暴れでしたな。」

「それにつけて、あの三人と、五つのそりの人たちは、どうなりましたことでしょうか、しんぱいでなりません。」

群衆は、口々にそんなことをいいました。

「五日分の食物を用意していったそうです。」

「そうすれば、あと二日しかないはずだ。」

「それまでに帰ってくるでしょうか。」

「なんともいえませんが、神に祈って待たなければなりません。」

みんなは、気づかわしげに、沖の方を見ながらいっていました。

沖の方は、ただ、ぼんやりと氷の上が光っているほか、なんの影も見えなかったのです。

とうとう、赤いそりが出てから、五日めになりました。みんなは、今日こそ帰ってくる

だろうと、沖の方をながめていました。

その日も、やがて暮れましたけれど、ついに、赤いそりの姿は見えませんでした。

六日めにも、みんなは、海岸に立って、沖の方をながめていました。

「今日は、もどってくるだろう?」

「今日帰ってこないで、五つのそりにも変わりがあつたのだぞ。」

みんなは、口々にいっていました。

しかし、六日めにも帰ってきませんでした。そして、七日めも、八日めも……ついに帰

ってきませんでした。

「捜しにいった方がいいものだろうか、どうしたらいいものだろうか……。」

みんなは、顔を見合っていました。

「だが、こんどは捜しに行くか。」と、あるものはいいました。

みんなは、たがいに顔を見合いました。けれど、一人として、自分がいくという勇氣のあるものはありませんでした。

「くじを引いて決めることにしようか。」と、ある男はいいました。

「俺は、怖ろしくていやだ。」

「俺もいくのはいやだ。」

「……………」

みんなは、後退りをしました。それでついに、救いに出かけるものはありませんでした。

「みんなは、口々にこういいました、

「これは災難というものだ。人間業では、どうすることもできないことだ。」

彼らは、そういつて、あきらめていたのであります。

それから、幾年もたつてからです。

ある日のこと、猟師たちが、幾そうかの小舟に乗って沖へ出ていきました。真っ青な北海の水色は、ちょうど藍を流したように、冷たくて、美しかったです。

磯辺には、岩にぶつかって波がみごとに砕けては、水銀の珠を飛ばすように、散つていました。

猟師たちは唄をうたいながら、艀をこいだり、網を投げたりしていますと、急に雲が日の面をさえぎつたように、太陽の光をかげらしました。

みんなは不思議に思つて、顔を上げて、空を見上げようとしみますと、真つ青の海のおもてに、三つの黒い人間の影が、ぼんやりと浮かんでいるのが見えたのです。その三つの黒い人間の影には足がありませんでした。

足のあるところは、青い青い海の、うねりうねる波の上になつていて、ただ黒坊主のように、三つの影が、ぼんやりと空間に浮かんで見えたのであります。

これを見た、みんなのからだは、急にぞつとして身の毛がよだちました。

「いつか行方のわからなくなった、三人の亡霊であろう。」と、みんなは、心でべつべつに思いました。

「今日は、いやなものを見た。さあ、まちがいのないうちに陸へ帰ろう。」と、みんなはいいました。そして、陸に向かつて、急いで舟を返しました。

しかし、不思議なことに、まだ陸に向かつて、幾らも舟を返さないうちに、どの船も、

なんの故障こしょうがないのに、しぜんと海うみにのみ込まれるように、音おともなく沈しずんでしまいました。

つぎの話はなしは、寒い冬ふゆの日ひのことです。海うみの上うへは、あいかわらず、銀ぎんのように凍こおっていました。そして、見みわたすかぎり、なんの物影ものかげも目めに止とまるものとはありませんでした。よく晴はれた、寒さむい日ひのことで、太陽たいようは、赤あかく地平線ちへいせんに沈しずみかかっていました。このときたちまち、その遠とおい、寂せきりよう寥ようの地平線ちへいせんにあたつて、五ごつの赤あかいそりが、同じおなほどにたがいに隔へだてを置いて行儀ぎようぎただしく、しかも速すみやかに、真ま一文字もんじにかなたを走はしつていく姿すがたを見みました。

すると、それを見みた人々ひとびとは、だれでも声こえをあげて驚おどろかぬものはなかつたのです。

「あれは、いつか、三人にんを捜索そうさくに出でた、五人にんの乗のつていた赤あかいそりじゃないか。」と、それを見みた人々ひとびとはいつたのです。

「ああ、この国くにに、なにか悪いことわるがなければいいが。」と、みんなはいいました。

「あのと看、あの五人にんのものを救すくいに、だれもいかなかったじゃないか。」

「そして、あの後ご、なにもお祭まつりひとつしなかつたじゃないか。」

みんなは、行方ゆくえのわからなくなつた、仲間なかまに対して、つくさなかつたことが悪いと、はじめこうかいて後悔こうかいしました。

この国くににきたひとは、黒い人くろひとと赤いそりあかのはなしを、不思議ふしぎな事実じじつとして、だれでも聞きかされるでありますよう。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「赤い鳥」

1922（大正11）年1月

※表題は底本では、「黒《くろ》い人《ひと》と赤《あか》いそり」となっています。

※初出時の表題は「黒い人と赤い櫓」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月26日作成

2012年12月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黒い人と赤いそり

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>